

○議長（茅沼隆文）

再開いたします。

午後 3 時 2 0 分

○議長（茅沼隆文）

引き続き一般質問を行います。

それでは、4 番議員、前田せつよ議員、どうぞ。

○4 番（前田せつよ）

こんにちは。議員番号 4 番、前田せつよでございます。

通告に従いまして、二つの項目について質問をいたします。ファミリーサポートセンター事業のさらなる充実した展開を。

ファミリーサポートセンターとは、子育て家庭を応援するために個人対個人で行われる支援事業のことを言います。援助の基本は子どもさんを預かるわけですが、託児をする場所は原則として支援をしてくださる人の家になっております。開成町では、ファミリーサポートセンターを運用するために事務局が昨年 9 月に設置されました。センターの事務局は町役場の道路を渡りまして東側にあるビルの一室、2 階にございます。

その事業の目的は、会員登録制の中で営まれるわけでございますが、子育ての援助を受けたい人、おねがい会員と子育ての支援を行いたい人、行ってもいいよという人、まかせて会員が、お互いに助け合うことで安心して子育てができる環境づくりにあります。今、運用 8 カ月を経て登録会員数は 7 0 名を超え、順調な運営がなされているというふうに聞いております。これは、町ぐるみの子育て支援事業として、多くの町民から喜びの声が届いているかと思います。

そこで、おねがい会員に配慮した事業の展開ということで、利用する時間の単位、刻み方ですね、この見直しや事業等の改善をしてほしいという要望が多く聞かれます。そこで、1、本町における利用料金の設定ですが、利用をスタートする最初の時間帯が 1 時間単位になっています。平日 7 0 0 円で運用がなされておりますが、それを最初、スタート時から 3 0 分、平日 3 5 0 円単位に変更するお考えはいかがでしょうか。2、援助をお願いする子どもが兄弟がいて一緒に同時にお願いをする場合、2 人以上となりますが、そのときの利用人数に対して割引をするなどの利用料金の見直しをしてはいかがでしょうか。3、ファミリーサポートセンターの事務所内のあいているスペースを使って、子育てに有益な品物のリサイクルのコーナーを設けてみてはいかがでしょうか。

壇上での質問は以上でございます。答弁、よろしく願いをいたします。

○議長（茅沼隆文）

教育長。

○教育長（鳥海 均）

前田議員のご質問にお答えいたします。

一つ目の本町における利用料金の設定は 1 時間単位、先ほど言われましたように 7

00円で運用されているが、30分350円単位に変更してはについてお答えいたします。

町では、子育てを町民同士で支え合う仕組みとしてファミリーサポートセンターの運用を、先ほど議員のほうからありましたように26年9月から開始をし、現在の利用料金は、最初の1時間に満たない場合は1時間分を、1時間を超える場合は30分単位で認定しています。平成26年度までの利用実績では1件当たりの平均利用時間は2.9時間であることや、運用を開始して時間もないことから、直ちに料金設定を変更するという事は考えておりません。現在、登録会員や事業受託者から料金変更に関する意見等は直接、町には寄せられていませんが、この事業はおねがい会員、まかせて会員双方の合意の上で成り立つものです。今後、アンケート調査の実施などを通じ、両会員の意見を聞きながら内容変更を含めて考えてまいりたいと思います。

二つ目の援助をお願いする子どもが2人以上となったときの利用者割引を考えてはについて、お答えします。現在は、兄弟姉妹の預かりの要望に対しては保育士などの資格を持つまかせて会員に対応をお願いし、利用料金は子どもの人数分をいただくことになっています。このことに関しましても、両会員の意見を聞きながら対応を考えてまいります。

三つ目のファミリーサポートセンターの事務所内にリサイクルコーナーを設けてみてはについて、お答えいたします。

町では、先ほどの議員の質問にもありましたように、開成駅東口にて子育て支援センターとファミリーサポートセンターをあわせ持つ子育て支援拠点の平成28年4月開始を目指して準備を進めております。リサイクルに関する実施形態はさまざまな方法が考えられますが、子育て関連情報の提供事業の一環として、開成駅東口の子育て支援拠点開始後の利用者の反応を見ながら、その点については考えていきたいというふうに考えております。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○4番（前田せつよ）

再質問させていただきます。

まず、町民の皆様のお声でございますが、若干、私のほうに届いている内容をご紹介します。まずは、まかせて会員さんからのお話でございました。実は、私がまかせて会員になって預かっていたところ、30分にも満たなかったと。そのときに料金をいただくのに700円ということで、かなり心苦しかったというようなお話がありました。また、会員ではないけれども、ファミリーサポートセンターというものに興味があるのだという方のお話でございました。年齢も年齢なので、30分ぐらいだったら孫のようなお子さんを見てもいいかなと思うのですよとかというお話もあったところでございます。

答弁の中でアンケートを行うとのことですが、いつごろ、どのような内容でアンケ

ート調査を考えておられるのか、答弁願います。

○議長（茅沼隆文）

子ども・子育て。

○子ども・子育て支援室長（中戸川進二）

ただいま前田議員のご質問で、アンケートの実施に関して、どのような内容で行うのかということですが、アンケートにつきましては、今、答弁にもありましたように、おねがい会員、まかせて会員、両方の方に意見を聞いて、今、前田議員がおっしゃったようなことが適正なのかどうかといったことを探ってまいりたいと思います。また、あわせて、利用に当たって不都合がないかとか、さらに逆に申しますと利点は何かなとか、そういったことも探りながら、今後、この事業の充実を図るための基礎情報として情報を仕入れるために実施してまいりたいというふうに思います。

時期につきましては、できるだけ早い時期に行いたいのですが、一応、平成27年度中には、今年度中にはそのような形で実施をしてまいりたいというふうに考えております。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○4番（前田せつよ）

27年度中というお答えでございましたが、同僚議員が今まで一般質問された中で、開成町は子育て支援を充実させて定住人口を図りたいのだという町長の表明もあったわけでございます。ここで町長にも伺いたいと思うところでございます。ファミサポの関係で、実は、もうひとかた、開成みなみの街開き式に声をかけられた新住民の方からのお話でした。私は、南足柄からこちらに引っ越してきましたと。開成町は子育てしやすいというふうに聞いていたのだけれども、南足柄では30分刻み、さらに、うちは子どもが2人いるのだけれども2人目は半額になっていると、どうして開成町はそうではないのですかというようなご質問がありました。近隣の市・町を見ますと、小田原市も最初から30分単位、松田町も最初から30分単位で運営がなされているところでございます。町長のご所見を伺いたいです。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

スタートのときに近隣を参考にしなかったということになるのかもしれませんが、その辺は先ほど課長が答えたように、いろいろな会員さんのご意見を聞いて、お互いがありますので、預かるほうも心苦しいという方もいれば、ボランティアの部分を含めますけれども、やはり仕事という部分もありますので、その辺のお互いの関係をきちんと調査しながら。価格設定というのは、スタートしたばかりですので、その辺を考えながら料金設定については考えていきたいと思っています。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○4 番（前田せつよ）

皆さんのお声を拾い上げていただいて、料金ということで、お金に関する内容のことでございますのでデリケートな部分もあるかと思っておりますので、その点、しっかりと酌み上げていただくアンケートの問いかけの文章等々、検討していただきたいなというふうに思うところでございます。

同じ料金にかかわることで、先ほど2項目目の2人目の割引の件も重複したことになるかと思えますけれども、これもあわせた形でアンケートの内容には取り込まれるというふうな解釈でよろしいでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

子ども・子育て支援室長。

○子ども・子育て支援室長（中戸川進二）

先ほど申し上げたとおり、今回、前田議員ご指摘の件については、アンケートの中でしっかりと捉えていきたいと思っております。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○4 番（前田せつよ）

期待して待ちたいというふうに思います。

3項目目のリサイクルコーナーに関しましては、東口、駅の支援センターのところで考えてくださるという答弁をいただいたところでございます。その件に関しましては、もったいないですとか大事にしなければならないということで、かなりご年配のお孫さんが近くにいらっしゃる方からもそういうお話がありまして、それも楽しみに待ちながら、ファミリーサポートセンターの事業が皆様に直接的にかかわって、広く町民にファミリーサポートセンターの機能のすばらしさ、充実さ、また、それに対して町民の方が利便性を持てるような仕組みづくりがさらに進むことを期待して、1項目目の質問をここで閉じさせていただきたいと思います。

2項目目に参ります。認知症徘徊者の早期発見のために模擬訓練の実施を。

本年1月、政府は認知症施策推進総合戦略「新オレンジプラン」を策定いたしました。「新オレンジプラン」は、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住みなれた地域で自分らしく暮らし続ける社会を目指すとの基本的な考えのもと、安全確保として独居高齢者の安全確認や行方不明者の早期発見・保護を含めた地域での見守り体制の整備を掲げております。このプランの中で、次のようなものが示されておりました。今から3年前には65歳以上の約7人に1人が認知症であるとされておりました。開成町に、それを当てはめてみました。3年前ということですので平成24年の開成町人口統計を調べましたら、65歳以上が3,653人いらっしゃいまして、その7分の1というところで計算をいたしますと522人という人数になります。

日ごろより町内の防災無線では、また南足柄や小田原の防災無線でも聞こえてきますが、行方不明者捜索のお願いというのが流れてきております。今後、その放送による効果を上げるために、町の対策として模擬訓練を折に触れて実施する、つまり定期

的に認知症もしくは行方不明者を探す訓練、そういう模擬訓練を定期的にするということによって、地域住民が行政等と連携しながら探し、声をかけるなどしていくことで、無事に保護しやすい町、また徘徊しても安心な町になると考えます。

そこで、次の2点について伺います。①として本町における認知症高齢者の把握状況と自分らしく暮らし続けやすい対策はどのように図られているでしょうか、②本町として認知症で徘徊する高齢者等を搜索する模擬訓練を実施するお考えはいかがでしょうか。答弁、お願いします。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

それでは、前田議員の質問にお答えします。

一つ目の認知症高齢者の把握状況についてですが、開成町の認知症高齢者の把握状況、65歳以上の高齢者のうち要介護または要支援の認定を受けた認知症高齢者は、平成26年7月現在202人です。これは、第6期開成町高齢者保健福祉計画の策定の際に、介護保険の主治医の意見書に認知症という病名がついた方の数を調べた結果となっております。65歳以上の一般高齢者の人数は3,804人ですので、認知症高齢者の割合は5.3%となります。また、要介護・支援認定者は442人です。これに対する割合は45.7%、要介護・支援認定者の半数近くが認知症高齢者ということになります。中でもアルツハイマー型認知症は、平成23年7月時点では39人でありましたが、平成26年7月では72人に上ります。大幅に増加している状況にあります。

国は、本年1月に認知症施策推進総合戦略、いわゆる「新オレンジプラン」を策定いたしました。この中の基本的な考え方として、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住みなれた地域で、よりよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すということとし、認知症への理解を深めるための普及啓発の推進や認知症の人の介護者への支援など七つの柱を掲げ、施策を推進することとしております。

一方、開成町においても本プランに基づき、第6期開成町高齢者保健福祉計画に位置付けて事業を実施しております。まず、認知症への理解を深めるための普及啓発としては、認知症サポーター養成講座を開催しております。一般住民のほか小・中・高校生や働く人を対象とした講座を開催し、1人でも多くの理解者を増やしていきたいと考えております。既にサポーターとなった方には、さらに認知症の理解を深めるためのステップアップ講座の開催も検討しております。また、認知症の人の介護者や家族への支援としては介護家族教室や介護者の集いを開催しておりますが、さらに介護している家族がいつでも立ち寄って誰かに悩みを相談できる場の設置も必要と考えております。

次に、二つ目の認知症で徘徊する高齢者に対する搜索の模擬訓練についてでお答えします。

現在、開成町の認知症で徘徊する高齢者等の行方不明者の搜索については、平成1

2年度から神奈川県が中心となり広域的に各市・町ともに足柄上地区徘徊高齢者SOSネットワークを構築して、県下、関係機関で情報を共有しております。また、町内での検索においては、関係団体に連絡するとともに、警察からの要請により防災行政無線による放送を行い検索を実施しております。町では、認知症になっても安心して暮らし、認知症の方とその家族を地域で支える取り組みを進めていくことが重要と考えており、その取り組みの一つとして認知症の方が徘徊により行方不明になった場合を想定した徘徊高齢者搜索模擬訓練は必要であると考えております。

この模擬訓練を実施する効果として、早期発見・保護を含めた地域での見守り体制の整備を構築することが期待できます。また、住民が徘徊者への声かけを行うことにより、認知症の方と接する際に必要な知識を学ぶ機会とすることもできます。認知症の方への気づきと理解を深めるための普及啓発の推進に役立つものと考えております。模擬訓練を実施するに当たっては、まず最初に、住民に認知症を正しく理解をしてもらうため認知症に関する講習会を開催いたします。その上で近隣市・町を参考に関係機関の協力を得ながら訓練方法や内容等を検討し、模擬訓練を実施していきたいと思っております。

今後も、認知症の方が住みなれた地域、よりよい環境で自分らしく暮らし続けるため、優しい地域づくりを目指し施策を総合的に推進してまいります。そして、認知症予防に取り組むとともに、認知症の状態に応じた適切なサービス提供の流れを示した認知症ケアパスを作成し、地域包括支援センターとの連携を進め、認知症の方への支援や関係者への連携を強化、相談体制の整備など施策に取り組んでいきたいと考えております。

以上であります。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○4番（前田せつよ）

再質問させていただきます。

介護している家族が立ち寄って相談をできる場所を設定したいというふうに考えているということでございますが、今現在、どのようなことを、いつまでに考えていらっしゃるのか。例えばでございますが、提案なのですが、空き家を使って集いの場づくりというのはいかがでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

保険健康課長。

○保険健康課長（亀井知之）

お答えいたします。

家族がいつでも立ち寄って悩みを相談できる、一般的には介護者カフェとか認知症カフェと言われているものでございますが、先進事例で見ますと社会福祉法人が行っているということが多いようでございます。いつまでにということで、まだ具体的に計画があるわけではございませんけれども、一部の社会福祉法人が「やってもいいよ」

というような話も出ておりますので、今後、具体化が進むのではないかと考えておりますけれども、議員ご提案の一室を使ってということはなかなかちょっと難しいのかなと。やはり専門家が提唱するような、そういうような体制をつくるのが第一だと思いますので、そういう中で、どこにつくるかは検討すべきなのかなというふうに考えておるところです。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○４番（前田せつよ）

模擬訓練の件でございます。模擬訓練は実施していくという前向きな答弁をいただいたわけですが、開催単位ですけれども、どのような単位で、ペース的にはいつごろというようなもののお考えをお示し願いたいと思います。

○議長（茅沼隆文）

福祉課長。

○福祉課長（小宮好徳）

それでは、ご質問にお答えさせていただきたいと思います。

開催時期ですけれども、まず訓練の方法と内容を詰めたいと考えてございます。その上で開催時期を、関係団体の調整もございますので、その辺と調整しながら開催していきたいと考えてございます。今、明確にいつ開催というのは、回答はちょっとできないというところでございます。

実施単位ということですが、こちら、まだはっきりというか、考えてはございませんけれども、私の考えですと、とりあえず、モデル地区というのはおかしいのですけれども、特定の自治会を、町内全体ではなく特定の自治会でまず一回やってみたいと。その中で課題等が出れば、その辺もクリアしながら、だんだん広げていきたいなというふうに考えてございます。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○４番（前田せつよ）

私も一般質問をするに当たりまして、全国の、また近隣の認知症徘徊者の搜索のための模擬訓練を実施したよというところに問い合わせをしたり、また、お尋ねをしたりしてみましたところ、今、答弁をいただいたように、さまざまな形で、その行政に合った形で試行錯誤しながら開催をしているというような状況がございましたわけでございます。近隣ですと南足柄市さんが数年前にされたと。また、近いところでございますと、本年の３月１９日に真鶴町が１町で小田原の保健福祉事務所さんとタイアップした形で町を挙げてなされたということで、小田原保健福祉事務所の真鶴町にかかわった担当課長、担当職員の方にいろいろお話を伺ってきたところでございます。

若干、そのときの内容をご紹介します。当初、真鶴町は、徘徊者役の方を老人会の方に頼んでいたそうでございますが、当日は雨が降ってしまって、急遽、

町の保健師さん、職員を3人、徘徊者役でつけたと。その様子を見守るために、もう3人、職員がいて、それで防災無線で「今日は徘徊者の行方不明者の訓練をやりますよ」という放送を流したと。また、もちろん広報紙にもそれは載せていたのですけれども、しかし、それを知らなかったのですけれども、「どうしました」というふうな形で本当に声をかけてくださった町民がいたということで、職員の方がおっしゃるには、本当にこの訓練はただの徘徊訓練にはあらずと。本当に町を優しくできる、町の心に大きな栄養を与えてくれる大変重要な意義のある模擬訓練だったと、皆さん、異口同音におっしゃっていたところでした。

その中で私がびっくりしたのは、徘徊者役の方が3名いらして、その保健師さんが、もう、きちんとした身なりで徘徊者役をやったと。先ほど来、この訓練をするに当たって、しっかりと町民の方に、多くの方に認知症とはという勉強をしていたということが本当に大事だなと感じたところで、12年前に痴呆という言葉から徘徊という言葉に国が名前を改めましてから、町民の皆様、また老若男女の皆様が、認知症という形のイメージづくりというのは、本当にイメージさえつけることができない状況にあるのだなというふう考えたところでございます。

また、埼玉のほうでは、模擬訓練をやったのですけれども、探せど探せど見つからなかったと。そのかわり、ちょうど行方不明になりかけていた小学校から帰ってきた子どもさんを逆に探すことができたというようなエピソードもあったところでございます。

今までのやりとりを聞いた中で、最後に町長、何かご感想、ご所見、思いがございましたら、せっかくでございますので一言いただければと存じます。

○議長（茅沼隆文）

いいですか。町長。

○町長（府川裕一）

やはり一番大事なのは、認知症の方のことを皆さん、知ってもらわなくてはいいと思うのです。私も、初めてそういう人たちに接すると、何か変わった人だなと思ったりとか、何を聞いてもよく、その辺がうまく対応できない部分があったりとか。知っている人がいるかどうかというのはすごく大事だと思うので、訓練の前に、やはり先ほどの講習会とかいろいろな勉強会をやって、各地区ごとにきめ細かく、そういうふうなことをやっていくことが必要なのかなと思います。

開成町は、やはり自治会がいろいろなことでいろいろなことをやっていただいておりますので、モデル地区として1カ所、まずやってみて、それがうまくいけば全町に広げていきたいと思っておりますので。認知症に対しての理解を深めてもらうのとあわせてやっていくのが一番大事だと思いますので、その点には力を入れていきたいと思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。



○４番（前田せつよ）

教育長に伺いたいなと。実は、先ほど小・中・高のほうにも認知症についての勉強、啓発をするというような方向づけでいきたいというような答弁をいただいたわけですが、真鶴町は４年前から、中学校３年生が高校受験を終えた後に、認知症というのはこういうものだよということを行政が寸劇を交えながら、これから社会に出ていく中学生にそういうものをなさって、ちょうど４年を迎えるというところだそうです。

○議長（茅沼隆文）

前田議員、答弁の時間がなくなりますよ。

○４番（前田せつよ）

はい。子どもたちに認知症に対する学習ということで、中学３年生にいかがでしょうか。卒業前に、そういう時間を設けるというお考えはございませんか。

○議長（茅沼隆文）

教育長、簡潔にお願いします。教育長。

○教育長（鳥海 均）

短い時間でということになると。大切なことはわかりますけれども、開成町はＡＥＤの研修をやったり防災訓練をやったり開成独自の子どもたちへの教育をやっていますので、考えてはおきたいというふうに思います。

○議長（茅沼隆文）

前田議員。

○４番（前田せつよ）

これで私の一般質問を終わらせていただきます。

○議長（茅沼隆文）

これで前田議員の一般質問を終了いたします。